

8月7日は「北海道花の日」

北海道では、道民の皆様へ「北海道の花」を知り、親しんでいただくことを目的に、毎年8月7日を「北海道花の日」と定めています。

また、「北海道花の日」を中心に、昼夜の寒暖差の大きさをから色鮮やかといわれる「北海道の花」のPRや、花のある暮らしを提案するロゴ「HOKKAIDO+1 毎日の生活にお花をプラス」の普及などを通じて、北海道の各産地で生産される花を知り、身近に感じてもらうことで、花の日常使いを推進しています。過去のキャンペーンの様子などをホームページで紹介していますので、ぜひご覧ください。



花は、その彩りの美しさや香りにより、多くの人に潤いと安らぎを与え、心豊かで健康な暮らしをもたらします。皆様もこの機会に大切な人へ日頃の感謝の気持ちを込めて花を贈ったり、お部屋に花を飾るなど、毎日の生活にお花をプラスしませんか？



HPはこちら

お問い合わせ 農政部農産振興課 TEL.011-206-9083

第10回「ディスカバー農山漁村の宝」が選定されました！

内閣官房・農林水産省により、全国568件の応募の中から、道内の2件が優秀賞・特別賞、優良事例に選定されました。

○優秀賞・特別賞 北海道中標津農業高等学校(中標津町)  
「高校生の力で未来の農村を盛り上げる！」  
<概要>

農業を学ぶ高校生が、幼稚園児から中学生を対象に農業を次世代へ受け継ぐ「食農教育」の先生となり、農産物の栽培やイベントの開催を手掛けるなど、大人や企業も巻き込む、幅広い活動により農村の活性化に貢献。



野菜の種まき体験

○優良事例 一般社団法人おけと森林文化振興協会(置戸町)  
「北海道に育まれた、うつわ。オケクラフト。」  
<概要>

40年前に地域クラフトブランド「オケクラフト」の生産を開始。生産・販売やイベント開催等を通じて町内外の人的交流創出や木工産業振興に寄与。地域住民にも広く親しまれ地域文化としても定着している。



オケクラフトの販売



HPはこちら

お問い合わせ 農政部農村設計課 TEL.011-204-5397

「普及職員」という職業をご存じですか？

「普及職員」(「普及指導員」ともいいます)は、北海道庁に勤務する職員ですが、農業の発展に貢献する地域密着型の公務員であり、スーツを着て仕事をする一般的な公務員像とは異なる、フィールドワークの多い職業です。

道内各地の農業改良普及センターに勤務しながら、農業者からの相談対応、農作物の生育や病害虫の発生調査、新しい品種や技術の現場への普及など、農業者の身近で北海道農業を支える仕事をしています。

農業者や地域の関係者と一緒になって地域

の将来像を描けることも魅力の一つです。

北海道農業に興味のある方は、就職の選択肢の一つとして、普及職員をご検討してはどうでしょうか。大卒や農業大学の卒業資格があれば、大学での専攻は問いません。興味のある方は、ホームページをぜひご覧ください！



HPはこちら

お問い合わせ 農政部技術普及課 TEL. 011-206-6436



現場で農業者に新しい技術を説明している様子

次号の「コンファ2024年秋号」を無料でお届けします

次号(2024年秋号)は10月頃に発行する予定です。送付を希望される方は、右の綴じ込みはがきか、QRコードから必要事項を記入してお送りください。2024年3月31日(当日消印有効)までにアンケートにご回答いただいた方の中から、抽選で20名様にオリジナルトートバックを差し上げます。(当選発表は発送をもってかえさせていただきます)

北海道農政部農政課政策調整係(問合せ先 011-231-4111(内線27-110)) Eメール nosei@pref.hokkaido.lg.jp FAX 011-232-4126

編集後記

今号では、皆さんに農山漁村を身近なものに感じ足を運んでいただくよう、農泊や農村ツーリズムを特集しました。旅行の計画を立てる際にはぜひ選択肢に加えてください。そのほか、「キラリ★農業系高校」の地域とのつながりを大切にする別海高等学校の活動や、北海道で生産量が増加しているにんにく、さつまいも、らっかせいの「新顔作物」の紹介など、今号も北海道農業の魅力が盛りだくさんの内容となっていますので、どうぞお楽しみください。



若松航洋さんと奥さんの晴菜さん。若松さんが育てた野菜は、国道37号沿いの道の駅「だて歴史の杜」などで購入可能。



新規就農者インタビュー

農のおしごとを選んだ理由はなんですか？

とにかく1日でも早く農業をやりたかったです。

伊達市 若松農園 (2018年4月新規就農)

周囲の助けがあるから頑張れます。伊達市に来て、本当によかった。

埼玉県出身の若松航洋さんが伊達市に移住してきたのは2016年のこと。地元の高校の農業科で3年間学んだ後、種苗会社で運営する滋賀県の園芸専門学校に2年間通い、卒業と同時に単身でこの地にやってきました。「訪れたこともなければ、名前すら知らなかった」という場所を選んだ理由は、「とにかくどこでもいいから早く農業をやりたかった」からだという。

「子どもの頃から外遊びが好きで、自然や植物に触れる中で野菜を育てることに興味を持ち、いつしか農業を仕事にしたいなと思うようになりました。もう1日でも早く農家になりました。そこで専門学校で校長先生に相談したら、卒業生がいる伊達市を紹介してくれ、迷わず移住を決めました。いま思うとこの行動力は自分のことながらすごいなと思います。」

そうして卒業生(親方)の元で研修を受け、2年後に6棟のハウスを構えて独立。最初は1人で作業を行っていたが、就労支援施設の方々に手伝ってもらいながら収量を増やして

現在は追加で3棟のハウスを建設中で、規模拡大を目指している。「成り物には未着手なので、今後チャレンジしていきたい」と目標を語る若松さんの今後の活躍に期待が高まる。

いった。2023年夏からは奥さんの晴菜さんも作業に入り、夫婦二人三脚で毎日を頑張っている。

1棟増えた7棟のハウスで育てているのは、チンゲン菜を中心に、ワサビ菜やフリルレタスなどの葉物野菜。暑さにも寒さにも比較的強いチンゲン菜は、育苗・定植・収穫までをハウスごとに行き回す。シャキシャキ感を大切に育てるため、特に水分調整に気をつかい、休む間もない。「とっても大変。それでも続けていられるのは、農業が好きだから。頑張っただけ成果が見えるし、まったく苦にはなりません。今でもアドバイスをくれる親方をはじめ、周囲の方々の助けがあるからこその今があるんだなと実感しています。本当にありがたいです」と若松さんは話す。